第2章

基本方針

本市における将来の街の姿や街づくりの基本的な考え方を示します。

1. 将来の街の姿

2. 街づくりの基本的な考え方

3. 将来都市構造

1 将来の街の姿

（1）街の将来像

所沢市総合計画の将来都市像や市民の意見などを踏まえ、本プランにおける街の将来像を以下に掲げます。

自然と調和し　安心して住み続けられる　持続可能で魅力的な街

拡大志向から成熟し、ゆとりある社会へと変わろうとするなか、街づくりの役割は大きく変化してきています。これまでのハード面の整備だけでなく、安全・安心な暮らしや働ける場所、身近に感じられるみどり、街なかのにぎわいの創出、自然環境や生物多様性の保全などに向けて、医療・福祉、商業、環境、文化などのさまざまな分野が互いに連携しながら魅力を高めていく持続可能な街づくりが求められています。

都心近郊の豊かな自然に恵まれたベッドタウンとして発展してきた本市は、人口減少・少子高齢化が進行するなか、“所沢に住み続けたい”“所沢に移り住みたい”と思われる、人を惹きつけるような街づくりが必要です。

本市の街づくりは、豊かな自然を守るとともに、人と人とのつながりを基本に安心して生活でき、多様な都市活動が展開される大きな可能性をもった都市として、市民はもちろん、本市を訪れる人々にとっても、人それぞれにさまざまな感覚で魅力を感じられるような、次世代に誇りをもって継承できる「持続可能で魅力的な街」をめざします。

（2）想定する街の人口規模

わが国では本格的な人口減少・少子超高齢社会に突入しています。

本市においても、人口減少・少子高齢化の進行により、経済活動への影響が予想され、今後の街づくりは既存資源を活用しつつ、都市の質と活力を高めることが求められています。

本プランの目標年次である令和22（2040）年の人口は「所沢市人口ビジョン」（平成28年3月）の推計では約30万人まで減少するとされていますが、人口ビジョン策定時より人口のピークが遅くなっていることや、人口ビジョンの将来展望に向けた施策の実施、そして、本プランの街の将来像である「自然と調和し　安心して住み続けられる　持続可能で魅力的な街」の実現に向けた街づくりを進めていくことで、本市の魅力を高め、人口減少を抑制することを目標とし、約32万人を想定します。

2 街づくりの基本的な考え方

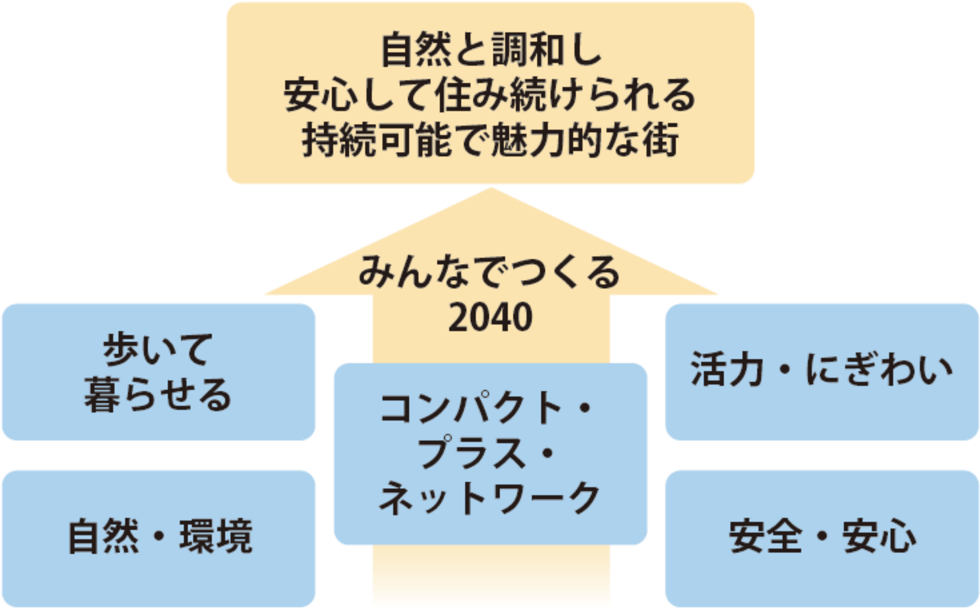
本市の20年後を見据えた街づくりを進めるにあたり、街づくりの基本的な考え方を示します。

人口減少・少子高齢化が進行するなか、本市が持つ自然環境などの強みや地域の特性を活かし、将来においても、市民が安心して暮らし続けられるとともに、社会活動がさまざまな分野において適切に持続・発展し、多様性のある魅力的な街づくりを進めていくことが求められます。

また、地域課題が多様化・複雑化しているなか、行政だけではなく、市民・事業者が地域の課題を自らの課題としてとらえ、共有し、協働して解決していくことが求められており、街の将来像の実現に向けて、コミュニティを基本とし、市民・事業者・行政が一体となって、「みんなでつくる」ことが必要です。

特に、本市が平成31（2019）年に策定した「所沢市マチごとエコタウン推進計画」においては、持続可能な社会の構築をめざすこととし、平成27（2015）年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」の実現に向けた本市の具体的な取り組みを示していることから、街づくりの取り組みがこれに資するよう考えていかなければなりません。

このような状況を踏まえ、以下の5つの考え方を中心に「持続可能で魅力的な街」をめざします。



街づくりの基本的な考え方

（1）コンパクト・プラス・ネットワークの街づくり

人口減少･少子高齢化が進行するなか、地域の活力を維持するとともに、市民生活に必要な医療･福祉、商業などの機能を確保し、各種サービスが効率的に利用できるように、一定のエリアに機能を集約するコンパクトな街の形成をめざします。

また、鉄道やバスをはじめとする公共交通機関などを有効に活用し、住まいから近隣の都市拠点を結ぶアクセスの充実を図るなど、公共交通ネットワークを構築し、市内の各地域を相互につないでいくコンパクト・プラス・ネットワークによる持続可能な街づくりをめざします。

（2）歩いて暮らせる街づくり

日常生活において歩くことが健康増進と関連性があるとされていることから、コンパクト・プラス・ネットワークの街づくりと併せ、福祉や健康などの分野と連携して歩きやすい・歩いてみたくなる歩行者空間の形成、バリアフリー化やユニバーサルデザインの整備を進め、身近な地域で生活ニーズを満たすことができるような、歩いて暮らせる街づくりをめざします。

（3）自然・環境に配慮した街づくり

本市の特徴である狭山丘陵をはじめとする自然環境の保全、街なかのみどりの創出、生物多様性の保全に配慮するとともに、自動車中心から公共交通機関や自転車などへの利用の転換による温室効果ガスの排出抑制、再生可能エネルギーの活用や環境負荷の少ない建築物の普及などによる低炭素社会の実現に向けて、自然・環境に配慮した街づくりをめざします。

（4）活力・にぎわいのある街づくり

都心へのアクセスが良く、市街地開発事業などによる良好な住宅地が多く存在している一方で、狭山丘陵をはじめとする豊かな自然や身近な農地が残されていることも本市の魅力です。現在、所沢駅や東所沢駅の周辺などで進められている新たな街づくりや産業施設の誘導により、さらに本市の魅力が高まることが期待されます。

このような魅力のある地域資源を活かして、多様化するライフスタイルや価値観にも対応した、暮らしやすい・働きやすい・訪れたくなる活力・にぎわいのある街づくりをめざします。

（5）安全で安心して暮らせる街づくり

自然災害や都市型災害のリスクが高まっているなか、老朽化しつつあるインフラなどの強靭化を進めるとともに、建築物の不燃化・難燃化などによる火災延焼対策、集中豪雨などに対応した雨水対策など、災害に強い安全な街づくりをめざします。

また、日頃から身近なコミュニティを基本とした共助・互助による、誰もが安心して暮らせる街づくりをめざします。

都市マスコラム

所沢市都市計画マスタープランとSDGs

平成27（2015）年9月、ニューヨーク国連本部において、「国連持続可能な開発サミット」が開催され、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されました。

このアジェンダの中では、人間、地球及び繁栄のための行動計画として、宣言や行動を掲げており、この目標がSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）で、17の目標とその下にさらに細分化された169のターゲットから構成されています。

我が国においても、平成28（2016）年5月に「持続可能な開発目標推進本部（SDGs推進本部）」を設置し、同年12月には「持続可能な開発目標（SDGs）実施指針)」が策定されました。

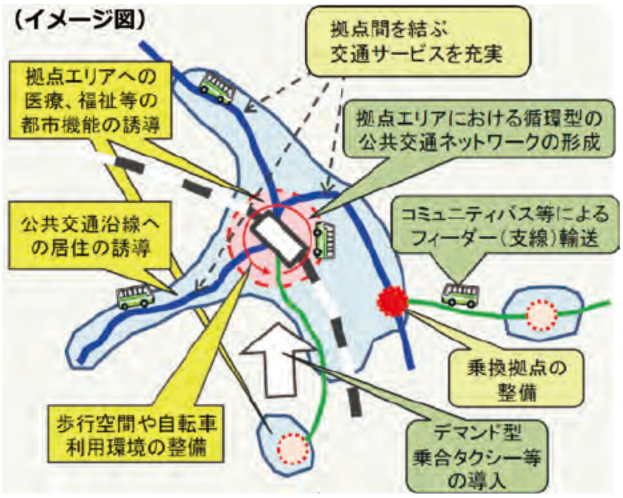
この実施指針では、「持続可能で強靭、そして誰一人取り残さない、経済、社会、環境の統合的向上が実現された未来への先駆者を目指す」ことを掲げており、地方公共団体においても、各種計画や方針の策定などにあたってはSDGsの要素を最大限反映することを奨励するとされています。

このことから、本プランにおいても目標の達成に向けたパートナーシップにより街づくりを推進し、その実現に貢献できるよう取り組みを進めます。

本プランが特に関連する目標

コンパクト・プラス・ネットワーク

人口減少・少子高齢化において、持続的な都市生活を可能にするため、医療・福祉、商業・業務などの都市機能を市街地に集約させたコンパクトな街に、住民が安心して暮らせるよう地域公共交通と連携し、都市機能を持った施設にアクセスできる都市構造のこと。



出典：国土交通省ホームページ

3 将来都市構造

将来都市構造は、街の将来像の実現をめざすため、本市の街の骨格を概念的に表し、分かりやすく示したものです。

そのうえで、本市の街づくりの経緯や地形、特性などを踏まえ、市民・事業者などの活動が盛んに行われる空間である「拠点」、拠点間の連携を図り都市の骨格を形成する「軸」を位置づけ、コンパクト・プラス・ネットワークの街づくりをめざします。また、コンパクトな街づくりを進めていくにあたっては、「鉄道駅を中心とした生活圏」による街づくりをめざします。

（1）拠点の形成

都市機能の誘導と交通結節機能の強化など、市民の日常生活に欠かすことができない都市環境の形成を図る4つの「都市拠点」、行政施設が集積し行政サービスのさらなる向上を図る「行政拠点」、自然や観光資源を中心に市民や市外からの来訪者の交流を図る「交流拠点」、新たな産業の誘導と産業活動の活性化を図る「産業拠点」として、以下に分類します。

都市拠点

①広域中心拠点（所沢駅周辺）

市内全域及び市外からの集客も視野に入れた高次都市機能や都市型産業を集積するとともに、多くの人が集まる交流機能を持ちあわせた、本市の顔となる拠点の形成をめざします。

②広域生活拠点（新所沢駅周辺・小手指駅周辺・東所沢駅周辺）

市内全域を対象とした都市機能を集積し、広域的に市民の日常生活を支える拠点の形成をめざします。

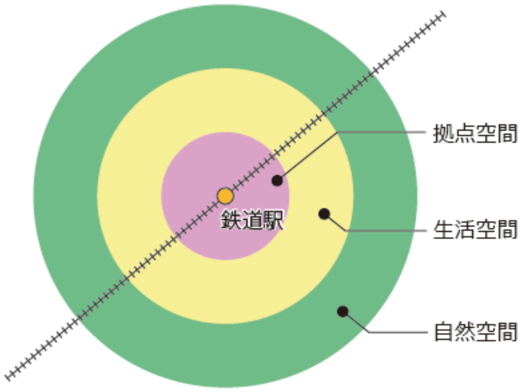
③地域生活拠点（狭山ヶ丘駅周辺・西所沢駅周辺・航空公園駅周辺）

駅周辺及び周辺地域を対象とした商業･サービス機能を集積し、地域住民の日常生活を支える拠点の形成をめざします。

④日常生活拠点（下山口駅周辺）

駅周辺及び周辺地区を対象とした商業･サービス機能を充実させ、地区住民の日常生活を支える拠点の形成をめざします。

広域中心拠点（所沢駅）



駅を中心として、拠点空間、生活空間、自然空間へと広がっていく基本的なイメージです。
実際はこのイメージが連続し、つながっていくものとなり、隣接した都市拠点の生活空間と重なり合ったりします。

拠点空間…駅周辺において、都市機能を集約し、にぎわいを創出する空間。
生活空間…拠点空間の外周部において、良好な住環境によるやすらぎを創出する空間。
自然空間…生活空間の外周部において、自然環境と調和したのどかさを創出する空間。

都市拠点における基本的な都市構造のイメージ

行政拠点

航空公園駅東側周辺は、市役所をはじめとした各行政施設が集積しており、適切な維持管理をしつつ、行政機能のさらなる向上を図る拠点の形成をめざします。

交流拠点

西武球場前駅周辺における狭山丘陵の自然やボールパークをはじめとする集客施設、「COOL JAPAN FOREST構想」の中心的な施設である「ところざわサクラタウン」などの資源を活用し、地域の活性化を図るとともに、多くの人が集まる交流機能としての拠点の形成をめざします。

産業拠点

三ケ島工業団地周辺地区、所沢インターチェンジ周辺地区、松郷工業団地周辺地区は、産業活動の活性化を図るため、都市基盤を整備するとともに、周辺の自然環境と調和した産業拠点の形成をめざします。

(2) 軸の形成

拠点間相互の利便性向上や活性化を図る「都市活動軸」、周辺自治体と連携を図る「広域連携軸」、みどりの核などを結び、やすらぎを創出する「みどりの軸」として、都市の骨格の形成をめざします。

都市活動軸

それぞれの拠点の特性を活かし、都市の魅力を高めるため、これらの拠点を結び、相互に連携する軸として、市域全体の活性化をめざします。

広域連携軸

鉄道や主要幹線道路による周辺自治体とのアクセスやネットワークなどを強化する軸として、広域的な連携をめざします。

みどりの軸

みどりの核などを結び、みどりの機能の強化を図る軸として、未来に継承できる質の高いみどりの保全をめざします。

(3) 鉄道駅を中心とした生活圏

本市は、11地区にまちづくりセンターを設置するなど、地域のつながりを形成しながら、地域課題の解決に取り組むとともに、市民の自主的な地域づくりを支援しています。また、街づくりアドバイザーの派遣など市民の自主的なまちづくり活動を支援し、豊かな活力ある地域社会の実現をめざしています。

一方で、昭和30年代以降、土地区画整理事業や都市計画道路の整備など、都市基盤の整備が行われたことなどにより都市構造が変化し、特に鉄道駅周辺は市民生活を支える都市機能が集積するなど、都市構造を考えるうえで日常生活の重要な都市拠点となっています。

このことから、コミュニティを中心とした地区別による街づくりとあわせて、今後のコンパクトな街づくりを進めるため、鉄道駅を中心とした一定の範囲を市民の生活圏としてとらえるとともに、公共交通ネットワークの充実に向けた街づくりをめざします。

新所沢駅前

小手指駅前

都市構造図

至狭山市
三富・くぬぎ山等
平地林周辺
至本川越
至入間市
至飯能
至飯能市
至川越IC
至さいたま市
所沢IC
関越自動車道
至練馬IC
至南浦和
三ケ島工業団地
狭山ケ丘駅
砂川堀
新所沢駅
小手指駅
航空公園駅
松郷工業団地
ところざわ
サクラタウン
東所沢駅
柳瀬川段丘崖周辺
東川
西所沢駅
所沢駅
至清瀬市
下山口駅
柳瀬川
秋津駅
新秋津駅
至池袋
至府中本町
狭山湖
狭山丘陵
西武球場前駅
遊園地西駅
至西武新宿
狭山丘陵
至東村山市
至西武遊園地
凡例
【拠点】
広域中心拠点
広域生活拠点
地域生活拠点
日常生活拠点
行政拠点
交流拠点
産業拠点
【軸】
都市活動軸
広域連携軸
みどりの軸
市街化区域
市街化調整区域
みどりの核
広域幹線道路・IC
主要幹線道路
主要幹線道路（構想）
鉄道・駅
ネットワークとなる河川

都市マスコラム

COOL JAPAN FOREST 構想

「COOL JAPAN FOREST 構想」は、本市と株式会社KADOKAWAが、共同プロジェクトとして取り組んでいる、文化と自然が共生した、誰もが「住んでみたい」「訪れてみたい」地域づくりを進める構想です。

この構想では、民間企業が建設する施設を活用して、行政が周辺環境を整備するとともに、産官共同で事業を展開することで、産業振興や地域の魅力創出に繋げていきます。

また、株式会社KADOKAWAが東所沢地域に建設する「ところざわサクラタウン」を中心に東所沢公園や東川の桜などが一体となり、所沢の魅力である「豊かなみどり」「人々のにぎわい」「元気な産業」が同居する「みどり・文化・産業が調和したまち」をめざします。

ところざわサクラタウン

「ところざわサクラタウン」は、「COOL JAPAN FOREST 構想」の拠点施設です。

株式会社KADOKAWAにより建設・運営される製造・物流施設と、文化コンプレックスを中心に、その他の機能（ショップ、カフェ、イベントスペース、ホテル、オフィスなど）を付加した集客性の高い施設です。

東所沢公園や東川沿いの桜と一体となった市民の憩いの場として、また、海外からの観光客も楽しめるエリアとして、2020年に完成します。